滅☆怪☆伝

Ｒｙｕ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
滅☆怪☆伝

【Ｎコード】
Ｎ２７４９Ｚ

【作者名】
Ｒｙｕ

【あらすじ】
これは霊にまつわる能力をもつもの達の不思議な不思議な物語である・・・

第壱話　行くぜ！霊怪探偵メッカイ！！（前書き）

この小説は息抜きのために書き始めたものです。
他の小説のアイデアが浮かばない時などに進めて行くのでかなり不定期になると思います。
それでもよければ読んでください！

第壱話　行くぜ！霊怪探偵メッカイ！！

日本には古来より妖怪、悪霊と言った類と戦い続けるもの達がいた。
霊滅術師・・・、陰陽師・・・、それ以外にもまだまだいる。

そして時は現代・・・
２０ＸＸ年、ここに一人の青年がいた・・・

「メッカイ～～！、待たんかこの馬鹿もんがあ～！！」
「誰が待てと言われて待つか、ジジイ！、今日も元気に外を満喫してくるぜ！」
「逃すか！」

そう言うと老人は刀をメッカイに向かって投げつける。

「ぎゃあっ！？、何すんだジジイ！、可愛い孫を殺す気か！？」
「ん？、可愛い孫なんて何処におる？」
「くぉのジジイ～・・・」
「いいからさっさとついてこい、修行の続きじゃ。」
「ちっ、わあったよ・・・」

メッカイは渋々老人について行く。

この老人の名は霊崎カイクウ、メッカイの祖父であり一流の霊滅術師である。
そして彼はメッカイ、一応この物語の主人公である。

「メッカイ、まずはこの廊下を雑巾掛けしろ、往復二十周じゃ。」
「へいへい。」
「返事は一回じゃ、アホたれ。」
「・・・（怒）」

メッカイは黙々と雑巾を掛け、二十周を終えた。

「・・・はあ、はあ、終わったぞじいさん。」
「よし、じゃあ次は水汲み、それから薪割り、わしの部屋掃除じゃ。」
「とりあえず最後おかしいだろ！」
「つべこべ言わんでさっさとやれ！、でないと飯抜きじゃ。」
「クソジジイ・・・」

・・・約一時間・・・

「お、終わったぞ、じいさん・・・」
「そうか、飯はできとるからさっさと食え。」
「よっしゃ！いただきまーす！」

メッカイが食べているのは精進料理と言い、いわゆる肉類など生臭物が入ってない料理である。

「・・・ふう、ごちそうさま！」
「お前、飯の事に関してはマジメじゃの・・・」
「そりゃあ自然に対する感謝ってもんはちゃんとしねえとな。」
「ほう、・・・まあそれはそれとして、今度は昼まで修行じゃ、朝と同じ事を二倍やってもらうぞ。」
「うえ・・・めんどくせえ。」
「お前がいつもサボるから慣れんのじゃろうが。」

「わかったよ、やればいいんだろ。」

そしてメッカイの修行は昼を挟み夜まで続いた。

「・・・くそぉ、ダリぃ、畜生・・・」

「まあ、今日はこれぐらいにしといてやろう。」

カイクウが振り向いた時だった。

ガッガッガッ！

「う、うわあ！？」

いきなり数本の短刀がメッカイめがけて飛んできたが、カイクウがそれを全て撃ち落とす。

「ひょひょひょひょひょ・・・・、良い霊力を持っているな、小僧。」

「な、なんだてめえ！？」

「み、源義経！？」

「じ、じいさん、源義経ってあの歴史上有名なあの・・・？」

「ああ、そうじゃ・・・！」

「その義経がオレ達になんの用だよ！？」

「ひょひょ・・・、貴様のその若々しい霊力、我等の完全復活のため、役立ててもらうぞ。」

「わしがおる限りメッカイには指一本触れさせんぞ！」

「ふん、老いぼれが・・・、引っ込んでいれば良いものの！」

義経はカイクウに襲いかかる！

キィン！

「くっ！」
「ほう、我太刀を受け止めるとは、ただの老いぼれではないようだな。」
「・・・何故お前がこの時代におる?、お前達は昔復活した際に平影清に黄泉へと送り返されたはず・・・」
「ひょひょひょ・・・、残念だがつい最近復活したこともある、その時も影清に邪魔されたがな！！」
キィン！
「ぬぅ、はあっ！」
ガキィンッ！
「ひょおっ！」
カイクウと義経の激しいぶつかり合いが火花を散らす。
メッカイは今の状況に恐怖を抱いていた。
「な、なんなんだよ、これ！？やべえよ、このままじゃ・・・」
カイクウと義経のぶつかり合いはさらに熱くなる。
「ぬう・・・、この老いぼれ、中々できる、やはり不完全な状態では・・・、ん？」
義経の目にメッカイの姿が写る。
「そうか、やつがいたな・・・」

「よそ見をしとる場合か！？」

「ふっ、老いぼれ、我にばかり気をとられ過ぎだ、ひょおおおーー！！」

「しまった、メッカイ！」

義経の放った短刀がメッカイめがけて飛んでいく！

「う、うわあああ！！」

ザシュッ！

「・・・・・・？」

「無事かメッカイ？」

「じいさ・・・」

『！？』

メッカイの前にいたのは体を貫かれたカイクウだった。

「おい・・・、嘘だろ？」

「・・・・よく聞け、メッカイ、今のお前ではやつには勝てん、ここは一端引いて安駄婆と言う三途の川の渡し人をあたるんじゃ・・・。」

「な、何言ってるんだよ、全くもって意味がわからねぇ！」

「いまは分からんでもいい・・・、いつか分かる・・・ぐふうっ！」

「じいさん！？」

「ひょひょひょ！馬鹿なやつめ、そんな小僧をかばうとは、愚かとしか言い様が無い！」

「・・・いま何つった？」

「愚かと言ったのだよ！そのジジイは！！」

「黙れ。」

「ひょ？」

「その鬱陶しい口を閉じやがれゲス野郎！！」

「！？、なんだこの小僧、突然霊力が上がった！？」

「うおおおお！！」

「くっ、ガキがあああ！！」

短刀を放つ義経、だが短刀は全てメッカイの振り回す刀によって弾かれる。

「ひょっ！？」

「ブッた斬る！」

ザンッ！

「ぐあああっ！、くっ、くそ、まさか我がこんな小僧に！、ここはひとまず引かねば！」

その言葉の後、義経は突如姿を消した。

「はあはあ、じいさん！」

カイクウに急いで駆け寄るメッカイ、だが・・・

「・・・・・」

「・・・嘘だろ？、オレはこれからどうすればいいんだよ？」

悲しみに浸るメッカイ、しかしその前に突如謎の男達が表れる。

「・・・・」

「な、なんだお前ら！？」

さらに男達はカイクウの死体を持ち去ろうとする。

「おい、待ちやがれ、じいさんをどうする気だ！？」

「これはこちらで処分させてもらう、何分秘密の多い体でね。」

「！、・・・てめえら鞍馬家の奴等だな？」

「ええ、そうです。」

「・・・相変わらず胸くそ悪い連中だ。」

「では急いでるのでね、去らばだ。」

シュンッ！

男達は風の様に去って言った。

「オレはどうすれば・・・」

メッカイはふと思い出す、カイクウが死に際に言ったメッセージを。

安駄婆と言う三途の川の渡し人を訪ねろと・・・

「・・・そうだな、立ち止まっててもしかたねえ、まずはその安駄婆ってやつに会いに行くぜ！」

と、メッカイが意気込んだ時だった。

「その必要は無いぜ！」

「何？、誰だ！？」

メッカイが振り向くとそこにいたのはアニメなどにいそうな白くて丸々したオバケだった。

特徴と言えば生意気そうな顔と長いシルクハットだった。

「お前のじいさんのメッセージは死に際に安駄婆に届いた！、だからこの俺がお前に協力してやるぜ！」

「・・・お前が？」

「おうっ！」

「はあ・・・」

メッカイは深いため息をついた。

「テメエなんだその態度！オレがやくたたずとでも思ってんのか！？」

「いや、だって正直お前弱そうだし。」

「バカ野郎！確かに俺は戦えないが役に立つんだよ！」

「もういいから帰れよオバケ。」

「テメエこのまま帰ったら俺が安駄婆に殺されちまうだろーが！！」

「ちっ、てめえもう死んでるだろ・・・、わかったよ、じゃあとりあえず山を降りよう」

「待てメッカイ、アテはあんのか！？」
「え、ああ・・・特に無えな。」
「だったら俺に考えがある。」
「何だよ？」
「幽霊、妖怪関係の仕事を解決する仕事さ！」
「はあ？」
「と言う訳で霊怪探偵ってのはどうだ！」
「まあ・・・いいんじゃないのか？」
「そうと決まれば下山だ！、行くぞメッカイ！」
「ちょっと待て！」
「何だ？」

メッカイが幽霊を呼び止める。

「お前名前何だ？」
「おっと、そうだったぜ、俺の名はジョージ・マルティンヴィッチ・カーネル・ザ・ワンダフル・ジョナサン三世だ！」
「長！？、もうジョジョでいいだろ！」
「・・・まあ、そうだな、素人には呼びづらいだろうな。」
「どうでもいいから早く下山しようぜ。」

ジョジョを置いて歩き出すメッカイ。

「ま、待て！俺を置いてくんじゃねえ！！」

こうしてメッカイとジョジョ、新しいコンビが誕生した。

第壱話　行くぜ！霊怪探偵メッカイ！！（後書き）

今回はシリアスになりましたが基本は笑いも有りでいこうと思います。
では次回もよろしくお願いします！

第弐話　寝床確保は大事だぜ！

義経との戦いから一日が経った。
メッカイはアテもなく歩いていた。

「・・・これからどうするか。」
「なあメッカイ、お前学生じゃねえのか？、学校はいいのか？」
「・・・それもそうだな、サボろうかなって思ってたけどやる事も無いからな・・・学校に顔出すか。」

メッカイはとりあえず公園のトイレに入り、制服に着替える。

「・・・さて、行くか。」

メッカイは学校へと歩き出す。

※※※※※※※※※

ー零天高校ー

「さて、どうすっかな・・・」

教室の前で立ち止まるメッカイ。
そんなメッカイにジョジョが声を掛ける。

「フツーに入ればいいだろ。」
「ちっとばかしサボってたから気まずいんだよ！」
「いいから入りやがれ！」
「うわ！？」

ガラガラ！ドンッ！

ジョジョは教室の扉をあけメッカイを突き飛ばした！

ドサッ！

教室の入口で倒れ込むメッカイ。

そしてクラスの人達の反応は・・・

「・・・・」

「・・・あれ？」

「別にお前の事なんてどうでもいいみたいだな。」

「それはそれで傷つく・・・」

メッカイは少し落ち込んだ。

すると一人の女子がメッカイに声をかけてきた。

「おはようございます、メッカイさん。」

「・・・ん？、ああ、おはよう桃子。」

「メッカイ、何だよこの可愛子ちゃんは！？」

「あら？、そちらの方は・・・？」

桃子の視線はメッカイからジョジョへと移る。

「な、お前俺の事が見えるのか！？」

自分の事が見える桃子にジョジョは驚く。

「桃子は霊感が強くてな、何でも小学生の時は不思議な体験をした

らしい、それで中学生の頃にこっちに引っ越してきて、何でも霊関係の事で困ってる人や霊を助けたくて霊術師の修行をしてるんだとよ。」
「はい、少しでも困ってる人や霊達を助けたいと思って・・・」
「へえ、メッカイと違って偉いんだな！」
「オイ、どういう意味だ！」
「・・・ところでメッカイさん、いつもより元気が無いようですが何かあったんですか？」
「え、オレ元気無いように見えるのか・・・？」
「はい、すごく。」
「鋭い子だねえ。」
「・・・まあ、桃子になら話してもいいか、実は・・・」

メッカイはいままでの事を桃子に全て話した。

「・・・そんな事が。」

「・・・ああ。」

二人の雰囲気は暗くなっていた。
だが、その時だった。

ガラッ！

「オイ、メッカイはいるか！！」

一人の男が教室に入ってきた。

「めんどくさい奴が来たぜ・・・」
「どこだあ、メッカイ！」

「怪堂さん、あそこにいますぜ！」
「メッカイ！・・・ってゆ、ゆ、幽霊！？」
「どうしたんすか、怪堂さん！？」
怪堂と呼ばれた男はジョジョにビビり尻餅をつく。
「怪堂、お前ジョジョが見えるのか？」
「じ、ジョジョってなんだ！？」
「怪堂さん、また何か見えたんすか！？」
「メッカイの横にマシュマロみたいのが！」
「マシュマロとは失礼な！」
「し、喋ったあ！？」
「オレが喋ったらいけねえのか！？」
「そうですよ琢磨さん、ジョジョさんはこんなに可愛いのに。」
「いや桃子、可愛いのは関係ないぞ。」
「も、桃子さん！？、まさか桃子さんも見えるんですか！？」
「はい。」
「・・・オバケ見えるの俺とメッカイだけじゃなかったのか。」
「ああっ！胸くそわりぃ！、オレはもう帰るぜ、じゃあな桃子、琢磨！」

メッカイはいきなりそう言うと教室から出て行った。

「・・・どうしたんだ、メッカイの奴？」
「琢磨さん実は・・・」
「なんですか、桃子さん？」

桃子は怪堂に今までの事を話始めた。

その頃メッカイは・・・

「はあ、あの不細工の面みたら気分悪くなって来たぜ。」

そう言いながらメッカイはタバコを取り出す。

「あっ、メッカイいけないんだー！、未成年なのぬぃー！」

「うるせーマシュマロ！」

「こら！」

ゴンッ！

メッカイは後ろから誰かに殴られた。

「痛え・・・！」

「たまに来たと思ったらすぐに下校か？、しかも校門を出たとたんにタバコとはな。」

「うるせえ、磯島！」

「先生をつけんか！」

ゴンッ！

「痛え！」

「ちょっと職員室までこい、茶ぐらい出すぞ、・・・ん？」

磯島先生が振り向くとそこにはメッカイの人形が代わりに捕まっていた。

「さらば！」

「忍者か貴様は！」

メッカイは急いで学校を後にする。

「メッカイ、明日も来いよ！」
「ヒマだったらな！」

そしてメッカイはしばらく歩き続けた。
「メッカイ、これからどうすんだ？」
「とりあえず寝床を確保するぜ！」
「寝床？」
「ああ、なるべく金のかからない場所をな！」

その言葉を聞いた人が突然メッカイに声を掛ける。

「君、お金のかからない寝床を探してるのかい？」
「ん、ああ。」
「ちょっといわくつきの場所なんだけどいいかい？」
「いわくつき？、受けてたつぜ！、オレはこれでも霊能力者だぜ！」
「そうか、じゃあ安心だね、ついてきて。」

メッカイは男性につれられて歩く。

「ついたよ。」
「・・・こりゃまたいかにもって感じだな。」
「そう言えば自己紹介がまだだったね、僕は城ヶ崎、城ヶ崎ケンジだ、この花咲荘の管理人だ。」
「オレは霊崎メッカイ、オレに任せときな！」

メッカイは自分の名を名乗ると花咲荘へ走り出す！

「・・・彼のお手並み拝見といこうか。」

ー花咲荘内部ー

「オイ！幽霊出てきやがれ！」
「出て来いって言って出て来る幽霊は花子ぐらいだぜ。」
「・・・・うるせえ人間だ、ぶっ殺されたいのか！」
「！？、どこだ！」
謎の声に警戒するメッカイ。

「そう慌てるな、まずはこいつらの相手をしてもらおうか。」
「きゅー！」
「な、なんだ、こいつら！」
「ク○ボーみたいだな。」
「んな事言ってる場合か！」
「きゅー！」

ク○ボーみたいなもののけ達はメッカイに一斉に襲いかかる。

「うおおおおおお！！！」

数時間後・・・・

「きゅう・・・」
「はあはあはあ・・・、くそ！、てこずらせやがって！」
「全くだぜ！」
「・・・お前殴っていいか？」
「おっと、安心するのはまだ早いぞ。」
「ギューッ！」

今度は先程のもののけが凶暴化したような奴等が襲って来た。

「「ぎゃあああああ！！ク○ッターだあああああ！！！」」

もののけ達がメッカイとジョジョに噛みつこうとした瞬間だった。

ドンドンドンッ・・・！

「ギュ！？」

ザンッ！

「ギュギュ！？」

間一髪でもののけ達は炭の様になって消えた。

「・・・あれ？」

「俺達助かったのか・・・？」

「二人とも大丈夫ですか？」

二人が顔を上げるとそこにいたのは桃子だった。

「桃子、お前どうしてここに、って言うか何だよその武器は！？」

「メッカイさん達の霊力をたどって来ました、それとこれは銃刀（ガンブレード）です。」

「そうじゃなくてなんでそんな物騒なモン持ってるのかだよ！」

「言いませんでしたか、私は霊術師であると同時に霊「滅」術師でもあるんですよ。」

「あははは・・・、霊術師って事しか聞いて無いよ・・・」

「桃子、こんなタワシみたいな奴等さっさと片付けちまえ。」

メッカイと桃子が話していると喋る黒猫が話を遮り桃子にそう言った。

「そう急かさなくてもちゃんとやりますわ、天の邪鬼さん。」
そう言うと桃子は一瞬でク○ッター達を凪ぎ払う。
「ギュー・・・」
「さあ、あなたの子分達は全員倒しました、早く出てきたらどうですか？」
「勇敢なお嬢さんだ・・・はーはッはッは、はーはッはッは、・・・降参です！」
・・・・・・・・・・・・・
「へ？」
「どういう・・・事ですか？」
「桃子、メッカイ、どうやら俺達は一杯食わされたみたいだぜ、あの外にいた男に。」
「な、なにぃ！？」
パチパチパチ・・・
すると拍手の音と共に外にいたはずの城ヶ崎が現れた。
「見事だよ、メッカイ君、桃子さん。」
「城ヶ崎さん！？」
「試させてもらったんだ、安駄婆さんに頼まれてね。」
「安駄婆だと！？」

安駄婆の名前に強く反応する天の邪鬼。

「どうしたんだ、黒猫？」
「安駄婆は俺を再び猫の体なんぞに入れやがった張本人さ！」
「それで桃子さんの手伝いをするよう頼まれて「快く」引き受けたんだよね、天の邪鬼。」
「・・・ケッ！」
「本当は試すのはメッカイ君だけのつもりだったんだが、君達まで来るとはね・・・」
「もしかして、まずかったでしょうか・・・？」
「いや、むしろよかったよ、安駄婆さんの言っていた通り高い実力を持っている事がわかった。」
「で、メッカイはどうなんだよ。」

桃子達と話していた城ヶ崎にジョジョはそう聞く。

「メッカイ君はいまはまだ実力不足だが潜在能力は高い、問題なく霊怪探偵をできると思うよ。」
「よっしゃあ！」
「あの・・・メッカイさん、霊怪探偵って？」
「ああ、ジョジョの提案で始める事になった霊や妖怪専門の仕事さ！」
「・・・私も手伝わせてもらえないでしょうか？」
「マジか？、助かるぜ桃子！、お前がいてくれれば安心だぜ！」
「・・・おいおい桃子、本気でこんな馬鹿の手伝いをするのか？」
「ええ、私の能力を役立てる事ができるのならば喜んで。」
「まあ、お前が決めたことなら俺は反対しないがな・・・」
「ありがとうございます、天の邪鬼さん。」
「ば、馬鹿野郎！安駄婆の命令だから仕方なく付いてやってるだけだ、そこのところを勘違いするんじゃねえぞ！」

「てれるなよ、黒猫くん！」
「め、メッカイ、テメェ！！」
「ふふ・・」

喧嘩を始めるメッカイと天の邪鬼、桃子はそれを見て小さく笑った。

「困ったな、これじゃメッカイ君に鍵を渡せないよ・・・」
「オイ城ヶ崎！」
「あ、そう言えば君がいたねジョジョ君。」
「鍵は後で俺がメッカイに渡しといてやるぜ。」
「頼んだよ。」

城ヶ崎はジョジョに鍵を渡すと奥の方へと去って行った。

「あの、メッカイさん。」
「なんだ、桃子。」
「私、準備もあるのでそろそろ帰ります。」
「おっ、そうか、・・・準備って何の？」
「ふふ、秘密です、さあ帰りましょう、天の邪鬼さん。」
「ああ、じゃああばよ、馬鹿メッカイ！」

「へっ、次にあった時は覚悟しとけ、黒猫！」

桃子達も家へ帰って行った。

「メッカイ、俺達も部屋に戻ろうぜ。」
「ああそうだな。」

メッカイ達は自分達の部屋へと向かう。

ガチャ！

「・・・ここがオレ達の部屋か。」
「なかなかいいじゃないか、時計もあるぜ！」
「もうこんな時間だったのか。」
「そりゃそうだろ、桃子が来たぐらいだぜ？」
「だな、桃子が学校サボる訳ねえしな。」
「ああ、お前と違ってな！」
「んだとテメェ！」
「落ち着けって、少し休もうぜ？」
「・・・まあ、それもそうだな、今日の所はもう休むか。」
「まっ、なんにせよ此所が俺達の出発点って事だ！」
「おう、オレ達の仕事、霊怪探偵のな！！」

こうして無事メッカイとジョジョは寝床と仲間を手に入れ新たな出発をするのであった・・・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2749z/

滅☆怪☆伝

2011年12月10日01時50分発行